



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	あとがき
Author(s)	松本, 秀人
Citation	
Issue Date	2010-07-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/43229
Right	© 2010 松本秀人
Type	bulletin (other)
Additional Information	



Instructions for use

あとがき

研究に至る経緯について

筆者は、図書館情報大学(現・筑波大学図書館情報専門学群)で図書館学を学び、司書資格を得たのち、縁あって日外アソシエーツという出版社に就職した。日外アソシエーツは、一般にはあまり知られていないが、参考図書や文献目録など図書館でよく使われる書籍を刊行したり、オンライン情報サービスや CD-ROM によるツールの提供なども行うなど、図書館が主要なおお客様であった。従って、会社勤めをしている間も、常に図書館の動向には気を配ってきたし、個人的にも図書館にはしばしば通っていた。

日外アソシエーツでの約 17 年間に及ぶサラリーマン生活を終えて札幌にUターンすることになった際、たまたま北大に観光学に関する大学院があることを知り、そこで学んでみたいと思ったが、大学院の受験に際しては「研究計画書」の提出が必要となる。悩んだ末に、自分になじみがある「図書館」に着目し、「観光と図書館」という研究テーマを設定した。

ところが調べてみると、「観光と図書館」というテーマを正面から論じた研究は見あたらず、また2年前の時点では、観光を意識した図書館の活動事例などが紹介されることも少なく、観光の分野でも図書館の分野でも、「観光と図書館」は未開拓のテーマであることを知った。

なんとか大学院に入学することができたのち、実際に研究を進めていく過程で、様々な方々に「観光と図書館の関連や連携の可能性などについて研究しています」と話すと、「私も観光に行った先で、図書館に行くことがありますよ」と違和感なく受けとめてくれる人がいるかと思えば、「あまり関係があるとは思えないけどなあ」という反応を示す人もいるなど、認識に相当の差があることを改めて実感した。そうした差が生じる理由には、「観光」というもののとらえ方、その人の図書館の利用頻度、観光まちづくりや地域おこしへの関心の有無、などいくつかの要因があることがわかってきたので、論文をまとめるにあたっては、そうした点もふまえて論文の構成や用語の説明などを見直すことが必要になった。

このような経緯により、観光学と図書館学の両分野にあまり通じていない人が読んでもわかりやすいように配慮したつもりであるが、どれだけの成功を納めることができたかは、各位の厳しい判断を待たねばならない。

論文への感想など

実際に修士論文が完成したのち、多くの人に読んでみていただいたが、その感想としては、「観光と図書館に、いろいろな接点があることがわかった」という好意的なものがある一方で、「筆者のいう“観光と図書館の融合”が具体的にイメージできない」とか、「現実問題として、図書館が解決しなければならない課題が多いので、“観光”にまで手を広げにくい」と現状の厳しさを指摘するものなどがあつた。あるいは、「実際の活動事例を情報共有し、お互いに研究しあうことで、メリットをのばし、デメリットを克服するようにはしていかなければならない」といった今後の展開方法についての助言なども頂戴した。これらの反応は今後の研究に活かしていきたいと思う。

また、「この論文を読んで、図書館のこれまでにない一面を知ることができた。観光に行ったら、現地の図書館をぜひ訪問してみたいと思った」という感想が意外に多く、多少なりとも本研究には、図書館の活動を側面から応援する効果もあるのではと自負している。

反省やコメントなど

本論「第5章」の「4 今後の課題について」で述べていることと重なる部分もあるが、研究についての反省や、コメントを付け加えておきたい点などを、いくつか述べておく。

①仮説の検証について

本研究は、「観光と図書館の融合は、両者が抱えている課題を解決する一助になる」という仮説をベースとしている。従って本来ならば、実際に融合を行っている事例を分析するなどにより、「このとおり役に立っていた」と仮説を検証して結論をまとめるのが妥当である。しかしながら、日本において、観光と図書館の融合の試みは、まだまだ端緒についたばかりであるし、そうした状況下で一、二の事例を取りあげても、説得力のある分析は難しいと判断した。そこで、今回は「図書館の諸要素がどのように観光と結びつくか」という観点に主眼を置いて、できるだけ網羅的多角的に考察することによって、今後の研究の礎になることを狙いとした。

②アンケートについて

「観光と図書館」というテーマについて、各図書館の感想や意見をアンケートで確認してみようと考えたが、回答しにくいテーマであるように思われたし、発送と集計に人手を割ける状況でなかったため、本来ならば全国の公共図書館へ発送すべきところを範囲を絞って実施した。その際、

筆者の居住地が札幌であることから、アンケートの回答によっては実際に訪問してインタビュー取材などをしたいと考えて、道内公共図書館については全館を対象にした。

実施した結果は回収率が7割と予想外に高く、いろいろ参考になるコメントも多く寄せられた。「興味深いテーマだと思うので研究を頑張ってください」といった励ましや「このアンケートをヒントとして、自館の活動の新たな展開を考えてみたい」という反応には、大いに勇気づけられた。

第一回目のアンケートを行ったのちに、「前回のアンケートではこういう意見や統計結果が得られたが、これについてどう思うか」といった追加アンケートや、重要なコメントを寄せていただいた館への個別取材などを計画していたのだが、母の入院など家庭の事情などにより身边が慌ただしくなってしまう、こうしたフォローに着手できなかったことは残念であり、研究計画の甘さとして反省すべき点である。

③項目の分類について

一般に図書館学において、「図書館の3要素」とは「資料」「施設」「職員」とされる。当初はこの枠組みを用いて観光との結びつきを考察していたが、「資料」や「施設」はともかく、「職員」を「観光」と結びつける説明や分析には、いささか無理があるようにも思われた。そこで今回の研究では、「職員」という要素は「サービス」や「交流」という観点でとらえることとし、本論における「図書館の基本的な要素」としては「資料」「サービス」「施設」という項目立てとした。

図書館学に通じた方からみると、ちょっと違和感を感じられるかもしれないので、念のためお断りしておく。

④公共図書館以外の、観光との融合の可能性について

今回の研究では図書館の範囲を公共図書館に限定したが、もちろん専門図書館や大学図書館、学校図書館についても、観光との融合が考えられる。

専門図書館の中には、訪問者を広く歓迎する姿勢をとっているところもあるし、大学図書館も地域への公開や公共図書館との連携が進みつつある。学校図書館では、修学旅行への活用、地域文化や地域づくりに対する教育効果などが期待される。また動物園や博物館、美術館などに付属する図書室の整備も、見学体験を豊かにするためにますます重要になるだろう。さらにいえば、公共・専門・大学・学校という館種を越えた図書館間の交流が促進されることによって、地域の活性化に対して総体的に貢献することも必要になる。

このように興味深い要素をいくつも内包しており、今後取り組んでみたいテーマである。

⑤事例について

本書で紹介した事例はあくまで一例であり、リストは網羅性を目指したものではない。実際に活動をされている図書館からは「どうしてウチの事例がリストにないのだろう」と感じられる場合もあるかと思うが、ご了解をいただきたい。また事例はあくまで「参考になると思われる事例」であり、必ずしも直接的に観光と関連があるわけではないので、誤解されないようにお願いします。

研究が最終段階に入ったため事例収集を中断した去年の秋以降も、「観光と図書館の融合」に関連した試みが各地の図書館で行われている。自分がテーマとしているために多少ひいき目で見ていることもあるだろうが、そうした事例を知るにつけて、「これからますます観光と図書館の融合は盛んになるだろう」という予感を覚えるのである。

本や読書と観光との関係をめぐって

「観光と図書館」という関係性は、周辺に目を転じれば「本と交流」や「読書と旅」などに繋がっている。これに関連して例えば、

－「本に世界を旅させる」をスローガンにした「ブッククロッシング」

(<http://www.bookcrossing.jp/> downloaded at 2010.5.31)

－人を「生きた本」としてとらえ、その語り部である本人との交流や対話を求める「リビングライブラリー」(<http://living-library.jp/> downloaded at 2010.5.31)

－長野県伊那市高遠町による、日本初の「ブックツーリズム」として注目を集めた「ブックフェスティバル」(<http://www.takatobookfestival.org/index.html> downloaded at 2010.5.31)

などの活動がみられ、発想を豊かにしていけば展開の可能性はまだまだありそうに思われる。

しかし、このような試みが行われる一方で、老舗雑誌の相次ぐ廃刊や出版物の売り上げの長期低落傾向など、出版物を巡る状況は厳しさを増している。また、iPad の発売などによって書籍の電子化がいよいよ本格的に進む可能性が高まってきたり、携帯小説の普及やスマートフォンなど様々な携帯端末による「読書行為」のあり方なども、気になるところである。さらに文字・活字文化、読書文化の変容ばかりでなく、動画共有サイトやツイッターなどによる新たな「情報コミュニティ」の出現なども含め、図書館がこれからの時代にどう対応すべきか、どういう役割を担うべきかについて、いっそうの検討が必要になってくるだろう。

もちろんそれは観光も同じであり、現代社会の動向に様々な影響を受けながら、明るい話題と暗い話題が混在する状況において、これからの観光がどうあるべきか、どういう観光が人々を幸せにするかについての検討がますます重要になっている。

とはいえ、どのような変化が訪れたとしても、本質的に変わらない部分もあるように思われる。

膨大な読書量で知られる松岡正剛は「読書は他者との交際である」と述べている(『多読術』, 筑摩書房, 2009, p.199)。簡潔な表現であるが、この中の「他者」や「交際」は観光においても最重要キーワードである。読書の本質が他者に出会うことだとすれば、「読書はひとつの観光である」ということもできるのではないか。

また山口昌男は、ルネサンスに関連して、次のようなことを述べている。少し長くなるが引用してみよう。

「いわばルネサンスは、形骸化してしまった世界のモデルをなおも押しつけ、弾力性を失った神話を強制することに異議を申し立てる精神がいつの時代にもとる姿勢の集中的表現にすぎないのである。この精神が平俗な日常生活を相対化するために踏み出す第一歩は〈旅〉に出かけることである。己れをまだ汲み尽されていない価値の源泉に一步近づけるために旅装を整えることである。一つの文化のダイナミズムは多かれ少なかれこうした〈旅〉に出かけて来た人間によって再生産されつづけるのである。旅、何処へ？ 自分が属する日常生活的現実のルールが通用しない世界へ、自ら一つ一つ道標を打ち樹てて地図を作成しつつ進まなければ迷いのうちに果ててしまう知の未踏の地(ノーマンズ・ランド)へ、書の世界へ、自らを隠すことに知の技術の大半を投じている秘教の世界へ、己れが継承した知的技術を破産させるような知識で満ちているような知の領域へである。」(『本の神話学』, 中央公論社, 1977, pp.218-219)

このように述べて、「ルネサンスは一つの歴史の相であると共に、行為としての知の探求形式のモデルでもある」と山口はいう。ここにもまた読書と旅の関連が示されている。

こうした例のほかにも、本や読書を観光や旅とのアナロジーで表現した文章はよく見かけるし、「感動」「共感」「体験」「非日常」「異文化」「学習」「人格形成・成長」「余暇・レジャー」など、両者に共通するキーワードは多く存在する。従って、観光と図書館の融合について考える際にも、インターネット化や電子化といった時代の急激な変化にただ翻弄されるのではなく、その本質や共通項をよく見極めて、観光者(および図書館の利用者)にもたらされるものが何かを考えていくべきである。

融合と「新たな価値」について

本論の中でも述べているが、「融合」という表現を用いた背景には、たんなる観光と図書館の「協力」、「連携」、「コラボレーション」というだけではなく、それによって「新たな価値」が創造されるという点への意識が存在している。

しかし、今後、両者の融合が各地で実践されるようになり、またそうした取り組みが持続していけば、それは「新たな価値」ではもはやなくなってしまふ。例えば、従来あまり利用者として意識されていなかった「観光者」が、当然のように利用者として意識されるようになった状況を想定してみると、融合が進めば進むほど「新たな」という部分は問題ではなくなる。例えていえば、パソコンがまだ非力だった時代に、テキストのみならず画像や音声や動画が統合された環境を、ことさら「マルチメディア」と強調されていた状況が思い出される。パソコンのパワーが強化され、ソフトの使い勝手も向上するにつれ、やがて誰も「マルチメディア」といわなくなったように、当初は「新たな価値」自体に注目が集まるとしても、やがてそれが一般的となった段階では、「その環境をベースにして、さらに展開を進めていくにはどうするか」という点に関心が移行するのは当然である。

今後、観光と図書館の融合においても、融合の結果もたらされる新たな価値や状況に対する期待ととまどいが混在する状況がしばらくは続くと思われるが、やがて観光と図書館の融合が十分に進んだ状況となったとき、そこには図書館が地域文化を創造する拠点としてさらに活躍ができる次のステージが待っていることだろう。そしてそれこそが真の「新たな価値」なのである。

謝辞

最後になりましたが、本書を執筆するようにご配慮をいただいた石森秀三先生、修士論文の指導をしていただいた敷田麻実先生(主査)、吉田順一先生・高橋吉文先生(副査)、また CATS 叢書編集担当の山村高淑先生、および様々なご指導をいただいた諸先生方に、この場を借りて、お礼を申し上げます。